

## アレキサンダー・リューストの 現代の定位論

鉢 野 正 樹

Die Ortsbestimmungslehre Alexander Rüstows

Masaki Hachino

### Zusammenfassung

- § 1. Die Hochkultur entstand 10 Jahrtausend v. Chr., als das Nomadentum sich auf dem Bauerntum überlagerte. Ohne die Überlagerung hätte die Hochkultur nicht in der Geschichte hervortreten können. Denn die Arbeitsteilung unter der körperlichen und geistigen Arbeitern ist nur möglich, wenn ein Volk das andere beherrscht.
- § 2. So hat die Sozialstruktur in jeder Hochkultur Doppel-Schichtungssystem. Ohne Blutsergießung wäre keine Hochkultur entstanden, die sich nur mit der Blutsergießung dauerhaft erhalten kann. Nun so kommt es in Frage, wie ein friedliches Zusammenleben der Menschen möglich sei.
- § 3. Eine Doppel-Schichtungsgesellschaft kann nicht auf die Dauer bestehen, wenn jede Schichtung nur an ihr eigenes Interesse denkt. Jede soll auch das Interesse der anderen Schichtung berücksichtigen. So kann die Unterschicht der Oberschicht gegenüber gehorsam sein, nicht minder als die Oberschicht der Unterschicht gegenüber barmherzig. Darin erblickt sich das Ideal der Demokratie. Demokratie bedeutet nicht die Umstellung der sozialen Schichtung, die „sozialisierung“ heißen soll. Aber „Demokratisierung“ will, daß eine Schichtung der menschlichen Gesellschaft sich einer anderen freundschaft benehmen möge.

### 一、文化社会学の系譜

#### (一) リューストからレプケへ

アレキサンダー・リューストが盟友ウィルヘルム・レプケの著書「岩に砕ける波のごとく」(Gegen die Brandung 1959年)に寄せた美しい私信がある。一読して、学問的友情に触れ心

暖るものがある。世に美しいものは数々あるが、真理探求の同行の間にかわされた友情も、そのようなものの一つである。

この私信の中でリュストーは、レプケにあててこう言っている。「わが親愛なるレプケ君、世の中には我々のことをユートピアンだと言う者も居る、ロマンチストだと言う者も居る、反動家だと言う者も居るよ、しかし、そう言われたっていいじゃないか、だって、ヴィクトル・ユーゴーも言うように、ユートピアは明日の真理であり、現在、真理と呼ばれているものもみな昔はユートピアと呼ばれて来たではないか、ロマンチストと言われて結構、何故なら現代の文明が失なった尊い価値は過去に実現されていたではないか、反動家とののしられて結構、何故なら伝統をなくしたら人間の社会など成り立つわけがないではないか。」<sup>(1)</sup>と。

この私信の中で、わけでも感銘深いのは次の言葉である。「愛するレプケ君、君に向っては他の誰にもまして、きつい反動、復古なる非難があげせかけられている。しかし、それは明らかに君の生い立ちの故に、羨やましいことに他の誰にもまして、君が土着した崩れゆかない“伝統”(Tradition)に根を下ろしているからに他ならない。」<sup>(2)</sup>「君は田舎医者の子で、ハノーバーの田舎で人となったネ。」<sup>(3)</sup>「君の論文、君の講演には、農村生活の暖みから生れて来るこまやかな人間愛があふれている……聴く者の心に、村人への語りかけを覚えさせる。」<sup>(4)</sup>「レプケ君、君は“共同体”(Dorfgemeinschaft)の暖い雰囲気こそ、人間本来の生活条件、人間の条件と感じているんだネ。」<sup>(5)</sup>

リュストーがレプケに向ってこれこそ君のものであると言ったものは、同時にリュストーのものでもあった。人からユートピアン、ロマンチスト、反動家のとののしられようと、よきものはよきもの、正しいものは正しいもの、美しいものは美しいものである。これを一緒に守って行こうではないか、とリュストーは言うのである。かつては“伝統”とまでなって、人間の生活の中に根を下ろしていたもの、その“あるもの”が危機に瀕している。その“あるもの”こそ“共同体”に他ならない。共同体の崩壊する所、伝統も同時に消滅する。この意味で、伝統と共同体とは同義語である。日本民族は、戦後この点を深刻に体験しているのではあるまいか？

旧約聖書詩篇の中で“見よ、兄弟が和合して共におるのは、いかに麗しく楽しいことであろう”と歌われた人間和合の現実——共同体——を人間共同生活の精華と思わぬ人は居ないであろう。ところが、現代文明の現実の中から——家族の中から、企業の中から、国家の中から——このこよなく美しいものが失なわれつつあるのではあるまいか？

一体いかなる人類の歴史における因果律がこのような現実を生じさせたのであろうか？ リュストーの文化社会学は、究極的にこのことを問題にしている。リュストーの大著「現代の定位」(Ortsbestimmung der Gegenwart 1950年)全三巻は、伝統を失ない、共同体を失なった現代ヨーロッパ文明の一学究が必死の思いでこの問題を追求した結果に他ならない。我々は何処から来て何処へ行くのか——さまよえる文明の功罪を深刻に問わざるをえなかった二十世紀ヨーロッパの学究が現代の“定位”(Ort)を歴史に向かって問うているのである。

## (二) 企業家と未来社会

デュッセルドルフ市の商工会議所125周年の記念式に招かれたリュストーは、「企業の将来」(Die Zukunft des Unternehmertums)と題する記念講演を行なった。この講演の中でリュス

トーは二十世紀に入ってドイツは、半世紀の間に二度の敗戦、二度のインフレーション、三度の国家体制の崩壊を経験して来たと語り、この間ドイツの失なった最も貴重なものは、生命と財産と並んで“伝統”であると言った。レプケへの私信にもあった伝統とは、踏み固められた道のようなものである。祖父も歩き、父も歩き、だから我もまた歩く道である。伝統は、マイナスに作用すれば社会の発展を阻止するが、これがなくなると社会は混乱してしまう。何故なら、人は行動の規範——踏み固められた道——を失なうからである。このため人は、何をすべきか何をすべきでないかの道徳的感覚を失ってしまう。このような社会に、自由という名の美名の下に放縦がはびこるのも当然なことである。

トインビーが敗戦の後にはいかなる文明にも“精神的空洞”<sup>(6)</sup>が生ずると語ったが、この空洞はドイツの戦後にも、日本の戦後にも生じたことである。精神的空洞は、歴史の断絶、伝統の崩壊を意味している。今まで確かであった一切のことが疑わしくなり、価値観が崩壊し、足もとがぐずれ去り、先祖伝来のすべてのものが見劣りするようになってしまう。敗戦ショックより、敗戦後ショックの方がこの意味で恐ろしい。日本の戦後派世代が今この恐ろしいショックをじわじわと体験している。ところで、伝統のぐずれ去ったこの社会で、人はどうすればよいのであろうか？ それは、伝統——共同体の再建より他にないのではあるまいか？ 伝統のない、自明のもののない社会では、人間が安住することは出来ないであろう。従って、伝統なき時代に生れ合わせた戦後派世代は、可愛い子孫のために、安住できる伝統という名の箱舟をつくってやらねばならない。しかし、今はドイツにとっても日本にとっても世界にとっても模索の時代である。伝統のつづきは混沌として将来の伝統となるべき影さえ見えない。この現実リュースターは、敢えて一燈の光を投げようとするのである。

まずリュースターは言う。武力が支配する時代、富力が支配する時代は今や過去のものとなりつつある。武力がものを言った「封建的身分制国家」<sup>(7)</sup>(feudaler Standestaats)も、富力がものを言った「金権的階級制国家」<sup>(8)</sup>(plutokratischer Klassenstaats)も過去のものとなりつつある。かく言えば人は、国際社会の現実はどうかまだ武力がものを言っているのではないか、国家社会はどうかまだ富力がものを言っているのではないかと抗議しよう。しかし、かつては国家社会を支配した武力が国際社会へと移ったように、いずれの日にか武力も富力もこの地上を離れ行かないと誰が断言できるだろうか？ 人類の英知が充分成熟するならば……。

それでは、将来、武力、富力に代わる何が社会を支配し、いかなる社会が未来社会となるであろうか？ いずれにせよ、社会は“階層秩序”(Hierarchie)を欠くことは出来ない。レプケの言うように社会は教会のドームを理想型とし、主もなく首もなく長もない社会などありえない。ただし、将来、社会の上層を占めるエリートは、武力、富力によるものでない別の能力の持ち主であらねばならない。武力や富力をもつ者のように他者の上に権勢をふるうエリートであってはならない。全く逆に、他者の下に身を挺しうるエリートでなくてはならない。それでは、このようなエリートのもつ能力は、いかなる種類のものであろうか？ これは、仮に言えば“労力”<sup>(9)</sup>と名づけられるものであろう。先憂後楽の精神が、このようなエリートの背骨とならねばならない。リュースターは、このような労力の主体を将来の企業家に期待する。

このような将来の企業家は、リュースターによれば、企業、社会、国家において三つの課題を負うことが期待されている。まず、企業において、今までの経営者のように労働者に父性的愛撫者のように、また奴隷主的嗜虐者のように臨むのではなく、民主的企業連帯を形づくるよう

な経営者であること。次に、社会において、いずれは企業家の消費生活のパターンに追随するであろう労働者に健全な消費生活の模範を示す指導者であること。生活の「最適水準」は「最低水準」のわずかに上にあることを生活の実践によって身をもって示すこと。最後に、国家において、企業を超えた国家の利益には、常に譲歩しうる経営者であること。国家の活動を企業の利益に利用することをしないこと。リューストーは以上三つの課題は一つに帰するという。企業家が、労力の主体となり企業、社会、国家に献身的に奉仕するものとなるならば、以上三つの課題は自から果されることになるからである。

### (三) 宗教社会学か文化社会学か？

経済学という学問は十八世紀の末に起った新興の学問にすぎないが、イギリスとドイツではこれが生み出された時代の背景を反映して著るしい対照を見せている。イギリスの躍動する経済発展を背景に「国富論」を書いたスミス、イギリスの風圧の下で辛苦するドイツを背景に「国民的体系」を書いたリストの間では、経済を見る全く異なる「視点」が生じたとしても不思議ではない。この視点の相違は、両国の経済学に著るしい性格の相違をも刻印することになった。

スミス — マーシャル — ケインズに至るイギリスの経済学は、「政治経済学」(political economy) の名が示すように経済の現実を上から、政治の次元から見る視点をもっている。これに対して、リスト — マルクス — ウェーバーに至るドイツの経済学は、「経済社会学」<sup>(10)</sup> (Economic Sociology) の名が示すように経済の現実を下から、社会の次元から見る視点をもっている。

リスト — マルクス — ウェーバーに至る「経済社会学」は、マルクスを中興の祖として確立された。マルクスの「階級理論」のもつ soziologisch な視点は、マルクスの唯物論が批判されてからも、「経済社会学」の中に不動の地位を占めている。そして、マルクスのこの soziologisch な視点は、ドイツの後期歴史学派に継承される過程において二つの流れを形成した。ウェーバーとゾンバルトの流れである。ウェーバーは、マルクスの視点を継承しながらもマルクスの唯物論を批判して「宗教」の視点を加え「宗教社会学」(Religionssoziologie) を形成した。ゾンバルトは同じく「文化」の視点を加えて「文化社会学」(Kultursoziologie) を形成した。ウェーバーとゾンバルトの両社会学の相違は、近代(あるいは、資本主義)の成立を、前者は宗教改革に、後者はルネッサンスに求めるところに鮮やかに表わされている。

ところで、文化社会学は宗教社会学と鋭く対立する。何故なら、宗教社会学では「宗教」(ヘブライ的世界観の神中心主義)という視点を重視するため絶対的・倫理的・非人間的な性格をもつものに対して、文化社会学は「文化」(ギリシヤ的世界観の人間中心主義)という視点を重視するため相対的・心理的・人間的な性格をもつ。宗教という視点が絶対的・排他的であるのに対して、文化という視点は相対的・寛容的である。これは、「信仰」(fides)と「理性」(ratio)の相違でもある。

リューストーは、マルクスの soziologisch な視点を継承し、更にゾンバルトの文化的な視点をも継承する。ミュラーアルマックが、マルクスとウェーバーを継承し、宗教社会学を確立したのと同じである。従って、リューストーとミュラーアルマックとの間にも、宗教と文化の概念につきまとう対立がそのままに承け継がれている。宗教の視点はどうしてもウェーバーに見られ

るように重点的・抽出的・精神的 (geistesgeschichtlich) である。これに対して、文化的視点はゾンバルトに見られるように包括的・総合的・普遍的 (universalgeschichtlich) である。前者は深いが一面的になり易い、後者は多面的だが浅くなり易い。従って、リュースターとミュラーアルマックの両社会学が、相互に足りないところを補い合えば、政治・経済・社会の全体的現実により正確なアプローチが可能であることは容易に期待できることである。

## 二、高文化と重層構造

### (一) ピラミッドの法則

地球の歴史1億年、人類の歴史100万年、そして高文化の歴史は1万年である。悠久な宇宙の歴史の中で、人類の歴史など一場の夢のようなものかもしれない。しかし、この夢のような終末の一瞬の歴史を人類はいかに多くの不幸で彩って来ていることか。この終末的一瞬をせめても幸福に生きたいという願望はまだ人類の心の中に芽生えてはいない。このような願望が人間の心に宿るのは、ガンの宣告を受け追いつめられた個人の心にわずかに瞬時の輝きとして宿ることがあるにすぎない。このような願望は、まだまだ局地的な現象であると言えよう。

ところで、100万年の人類の歴史をとりまく自然環境はまことに冷酷なものであった。寒冷な四つの氷河期、そして温暖な三つの間氷期が夏が冬につぐようによりくり返えされた。寒冷な時には穴居し、温暖な時には活動する人類の営みがえんえんによりくり返えされたことである。しかし、今や地球は四つの氷河期と三つの間氷期——洪積世——をすぎて、新しい地質時代——沖積世——に入っていると言う。しかし、これは単なる第4間氷期であるにすぎず、第5氷河期が迫まっているのかもしれない。とすれば、原子兵器が現代の文明を破砕してしまう前に、新たな氷河が人類の文明をのみこんでしまうかもしれない。いずれにせよ、寒暖をくり返す自然環境の中で、人類の種は鍛えられて来たものとすれば、人類の自然的生存能力は極めて強靱なものと言うことが出来るであろう。太古の自然環境の中で絶滅してしまった種に比較して……。

人類が大河のほとりに世界最古の“文明”(Zivilisation)を築き上げる数千年前、紀元前1万年頃に人類の“高文化”(Hochkultur)は成立した。人類がアルタミラの洞窟に狩猟の絵を残し“文化”の痕跡をとどめるようになったのは旧石器時代の後期、紀元前1万年頃のことである。文化の痕跡が残されていることは、人類がようやくその日ぐらしの生活から解放されて、物質的生活から精神的生活へ発展しはじめたことを示唆するものである。この発展が、どのようにして起って来たかを問題にすることは、同時に高文化成立の条件を明らかにすることである。ところで、高文化成立の条件を社会学的に明らかにすることは、それほど困難なことではない。何故なら、高文化は精神的労働と肉体的労働との分業の上に成り立ちえたであろうから、この分業の成立過程を社会学的に説明すれば、同時に高文化成立の説明にもなるからである。

さて、人類の最古の生活形態——採集生活——において、精神的労働と肉体的労働の分業は起りえたであろうか？ 答えは否定的にならざるをえない。何故なら、採集生活においては、部族の全員が野山をかけめぐり、集めた食料でその日ぐらしを立てていたのである。余分な食料がえられても、同族の病人、老人、幼児を養うに足るばかりであったろう。部族の全員が、男女を問わず肉体的労働に従事するのであって、食料の心配をせず精神的労働に従事する有閑階級など養う余裕はなかったであろう。更にこういうこともある。同族の人数が30人、300人、

3000人ぐらいでは、精神的労働と肉体的労働の分業は起りえない。何故なら、採集生活のような場合には、一人の精神的労働者を養うためには、どれほど広い野山をかけめぐらなければならないかわからない。特に産物の豊かな地域であれば別である。しかし、四季折々に自然は人間に常に豊富な産物を恵んでくれたとは思われない。してみれば、このような生活の状態では、同族の間に人数の“分割”が起ったとしても“分業”など起りえたとは思えない。従って、一定の肉体的労働の階級が一定の精神的労働の階級を支えるという社会構造は同族の中から内生的に生じて来たものとは思えない。このような社会構造——リュースト<sup>(11)</sup>の言う「重層構造」(Überlagerung)——は外生的に起ったとしか思えない。かくして、社会の重層構造は、支配する部族による支配される部族の合体によって生じたものと思われる。おそらく、優劣を競う流血、斗争、征服というすさまじい戦いの中で重層構造は形成されたことであろう。重層構造が成立してしまうと、肉体的労働と精神的労働の分業は容易である。更に、精神的労働者の人数は肉体的労働者の人数の多寡によって決って来るから、“社会”という底辺の広さが、“文化”という頂点の高さを決めるという一般的な関係が成立することになる。リュースト<sup>(12)</sup>は、この関係を「ピラミッドの法則」(Gesetz der Kulturpyramide)と名づけたのである。

## (二) 牧畜民族と農耕民族

人類最古の文明が四大河川の流域に形成された紀元前4,000年をさかのぼること6,000年、紀元前1万年に人類の高文化は形成された。“文明”の揺籃地が河川の流域であったとすれば、“高文化”の揺籃地は、世界の屋根とよばれるヒマラヤ山脈を分水嶺としてその南側と北側とに広がっている。南側にヒンドスタン平野、北側にキルギスステップがある。

地球が温暖になると大陸をおおっていた氷河は解けて大海へと注ぎはじめた。陸地であった地域が海水の下へと沈みはじめた。大陸の氷解した水は、北のシベリヤ平野ではボルガ川、ドニエプル川を通して黒海に注ぎ込み、西のアルプス山脈ではドナウ川を通して黒海へ、東の天山山脈、パミール高原ではアラル海、カスピ海を通して同じく黒海へと流れ込んだ。こうして黒海に集められた大河の水は、当時ははるかに水位が低くかったであろう地中海へ滝となって流れ落ちていた。今日のボスポラス——ダーダネルス海峡は、まさにボスポラス——ダーダネルス瀑布であったことだろう。氷河が解けて氷河地帯がシベリヤ平野の北方へと後退した時、現在のキルギスステップに当る地帯に、巾500 kmの東西に走る平原が表われた。この「シベリヤのポケット」とよばれる平原地帯は、北ではシベリヤの氷河地帯に、南ではアラル海、カスピ海、黒海に、東ではアルタイ山脈、天山山脈、パミール高原、ヒマラヤ山脈に囲まれていた。ただ西では、ウラル山脈とボルガ川という比較的越えやすい境界線があるだけだった。この「シベリヤのポケット」とよばれる中央アジアの平原が、地表の乾燥がはげしくなかった紀元前1万年の自然環境において、人類のみならず全ての生物にとって恵まれた生棲地であったのである。この地域が、いわゆる「人類の子宮」(vagina gentium)であった。

この揺籃地において、人類は採集生活から狩猟生活、更に牧畜生活へと生活の形態を発展させて行く。野獣の追跡、待伏せ、思わざる遭遇——そして、格闘、捕獲という狩猟生活の中から、人類は徐々に野獣の習性を知るようになる。野獣の追跡という緊張に満ちた生活の中から、人類は野獣を観察し、その習性を理解するようになる。かくして人類は、野獣の行動の軌跡を理解すると共に、野獣の群れと行動をとにもするようになる。野獣の群れと、追う牧畜民

族の群れが数の上で対応するようになる。母獸を保護し、外敵を防止することも覚えるようになる。牧畜生活の中から熊祭りのような節獵、そしてトーテミズム（動物崇拜）という牧畜民族に固有の風習が生じて来る。牧畜民族の居住地は変化するために変らぬものは上に仰ぐ天のみである。ここから、牧畜民族に固有の天父信仰が生じて来た。

ヒマラヤ山系の北側に、採集生活—狩獵生活—牧畜生活の生活形態が発達したとするならば、その南側、ガンジス川流域のヒンドスタン平野では、採集生活—栽培生活—農耕生活の生活形態が発達した。山野に点在する食用植物を一ヶ所に集めて栽培することは、出産の前後安静を要する女性がはじめたことであったかもしれない。栽培のはじまりは移植によったものであろう。男女とも野山をかけめぐり食料の採集にあけくれた生活から、男性は採集に、女性は居住地で栽培に分かれて働く時が来た。ヒマラヤ山系の北で牧畜民族が男性的ではあるが野蛮な生活を送っている時に、南では農耕民族が女性的ではあるが文化的な生活を育てていた。自然の影響を直接こうむる農耕民族の間において、自然の寵愛をひき出さんとするシャーマニズム（自然崇拜）が起って来た。牧畜民族の合理主義—野獸を追う鋭い観察がこれを生む—農耕民族の神秘主義—穀物の死を通して増加する生命の神秘がこれを生む—、牧畜民族の父権社会、農耕民族の母権社会、牧畜民族の天父—神信仰、農耕民族の汎神多神信仰、このような原始的生活形態は、人類の揺籃の地で形成されたものである。

### （三）高文化の成立過程

高文化は最終的に牧畜民族が、農耕民族を支配することによって成立した。フランスの社会学者アドルフ・コスト（1842年—1901年）は、一億人の人間が千人ずつ十万のグループに分かれていたのでは文明は起らない、一億人の人間が一つの国家—一つの法律、一つの信仰、一つの希望—に統一される時豊かな文明が築かれると語ったが、一億の人間が一つの国家に統一されるのは、内生的でなく外生的にしか起りえない。コストの言うような法律と信仰と希望を一つにする国家が起るまでには、多くの血が流されたのである。リューストは、高文化を成立させた重層構造を“原罪”（Erbssünde）とまで言っている。ところで、高文化はいかなる過程を経て形成されて来たのであろうか？

#### ○ 狩獵民族による栽培民族の支配

中央アジアは、ヒマラヤ—パミール—イラン—アルメニヤ—アナトリアと東西にのびる山岳地帯によって南北に分けられるが、この山岳地帯も氷河期の終りとともに、アフガニスタン、チベット、トルキスタンに南北の通路が開けて来た。この通路を通して狩獵民族と栽培民族の接触が行なわれた。この接触は、栽培民族にとって災い以外の何ものでもなかった。何故なら、狩獵民族の侵入によって栽培民族の男性は殺され、女性は奴隷にされたからである。栽培民族の女性にとって今までは悦楽であった労働は苦役以外の何ものでもなくなった。

#### ○ 牛—牧畜民族による栽培民族の支配

北では狩獵民族が牧畜民族へと発展し、南では狩獵民族が栽培民族に同化されるようになった時、牛—牧畜民族が栽培民族を支配した。この度の両民族の接触も益あるものとは思えなかった。ただ、牛—牧畜民族との接触を通して、栽培民族は牛を用いた農業を知るようになった。穀物の栽培が行なわれ、牛耕による農業が発達すると、栽培民族は農耕民族へと発展した。

#### ○ 牛—牧畜民族による牛—農耕民族の支配

牛を牧する牧畜民族と、牛を用いる農耕民族の出会い、人類の民族的出会いの中で最も幸福なものであった。牛を共通項とした両民族の重層構造がこの時に成立した。牛をいわば媒介として両民族の間には共通理解の道が開かれていた。牛——牧畜民族による牛——農耕民族の支配という社会構造は、中央アジアの発祥の地より世界の各地に伝播する。世界の大河文明はこの時に成立した。この紀元前4,000年は、人類の最も幸福な高文化と、そして文明の時代であった。古代ギリシャ文明、クレタのミノス文明、エジプトの古王朝文明、シュメール・アカド文明、インドのハラッパ文明、中国の黄河文明、これら全てがこの時代に起された。この時代の文明には、平和と喜びの痕跡が残されている。それは、支配する上層民族の“いたわり”と、服従する下層民族の“温順”がきしみがちな重層構造に調和を生み出していたからに違いない。

#### ④ 馬——牧畜民族による牛——農耕民族の支配

人類にとって幸福であった文明の時代も、やがて終る時が来た。牧畜民族にとって飼育困難であった馬が、飼育出来るようになったからである。馬の飼育——戦車——騎馬と牧畜民族の戦力は拡大する。馬を駆って走る時、人には越ええぬ限界はないように思われる。馬上にあって人の背丈は2mを越す。馬上にあって人は天下を睥睨する。天下平定の抱負は、やがて天下支配の野望に変わって行く。馬の飼育はトルコ民族にはじまり、セム民族、インド・ゲルマン民族へと伝わって行く。

農耕生活に平和な日々を過していた民族が、ある日突然、馬上の人間と出会った時の驚きと恐れとは想像に難くない。かつて黒船に出会った時の日本民族も似たような驚愕を体験したに違いない。遂に、戦車を駆った民族の大移動が、紀元前2,000年頃に行なわれた。イタリア人をイタリアへ、イオニヤ人、アカヤ人、エオリヤ人をギリシャへ、ヒッタイト人をトルコへ、アーリヤ人をイランへ、カッシート人をバビロニアへ、ヒクソス人をエジプトへ、アーリヤ人をインドへとこの民族移動の波は送りこんだ。旧約聖書に、アブラハムが家族とともにハランの地を出発して、約束の地カナンに向って旅立ったと記されているのは、この大きな民族移動の流れの中で起った極めて見栄えなき決断と行動であったのであろう。エジプトでは文明が滅び、蛮族ヒクソス人がエジプトを支配したのもこの時であった。

馬——牧畜民族の大移動は、紀元前1,200年頃、騎馬民族の移動となって再びあらわれる。この大移動によって、ドーリヤ人はギリシャへ、カルデヤ人はメソポタミヤへ、ペルシャ人はイランへ、アーリヤ人はインドへ、フリギヤ人はトルコへ、イスラエル人はパレスチナへ、ペリシテ人はパレスチナ海岸へ、ヒッタイト人はエジプトへと送りこまれたのである。旧約聖書に有名なモーセに率いられたヘブライ人の出エジプトは、このような世界史的背景の下で敢行されたのである。エジプトが、騎馬民族ヒッタイト人の侵入に悩みに悩まされていた隙をついて、ヘブライ民族の徒歩によるほほえましき民族移動が果されたのであろう。

世界の高文化は、以上の民族移動によってその重層構造を決定したが、民族移動の波は紀元375年のモンゴル——トルコ——ゲルマン民族の大移動の時に、最後に十五世紀地理上の発見とともに起った旧大陸から新大陸への民族の大移動の時に再三あらわれて、それぞれ時代の転換に重大な影響を及ぼしたのである。



### 三、高文化の時代区分

#### (一) 重層構造の二つの原型

世界の四大文明が大河のほとりで栄えた時、同系統の文明が地中海の周辺にも栄えていた。エーゲ海文明と総称される——クレタのミノス文明、ギリシャ本土の文明、多島海文明——の中から、重層構造の二つの原型が生み出されることになる。

世界の文明が、調和のある重層構造の上に上層民族と下層民族による平和な人間共同生活を育てていた時に、北から襲って来た馬一牧畜民族の大移動はこの文明を馬蹄の下に蹴散らしてしまった。馬一牧畜民族の移動は、紀元前2,000年と1,200年に波状的に起こされたが、これによって重層構造は調和ある“自由”の関係から、調和なき“支配”の関係へと再び移しかえられることになった。但し、この重層構造の変質過程において、文明の東と西にはじめて本質的な相違があらわれることになったのである。それまでは東西両文明に同質であった重層構造が、馬一牧畜民族の侵入を境にして著るしい変化を見せることになる。オリエント（東）とオクシデント（西）の分かれ目は、この時代に生まれたものと思われる。それでは、重層構造の質的相違とはどのようなものであったのであろうか？

馬一牧畜民族の二度にわたる民族移動は、オリエントに関しては単に支配階級の交替を意味したにすぎなかった。紀元前2,000年の戦車一牧畜民族の後に、騎馬一牧畜民族が紀元前1,200年に移動した時には、先住戦車一民族が支配階級の座を追われ政権が交替しただけだった。重層構造そのものには何の変化も生じなかった。しかし、オクシデントにおいては、先住牧畜民族と後続牧畜民族の間にはこのような支配階級の交替、政権の交替は行なわれなかった。紀元前1,200年、ギリシャ本土に後続騎馬一牧畜民族であるドーリヤ人が南下して来た時、先住戦車一牧畜民族であるイオニヤ人は、二つのうちいずれかの道を選んでこれに抵抗した。一つは、ギリシャ本土に踏みとどまって、戦士の卑やしめる商業に転身することであり、他の一つは、対岸小アジアの西岸に移住し商業に従事することであった。おそらくは、ドーリヤ人との無役な戦いを回避し生業を他に転ずることによって活路を見い出そうとしたイオニヤ人の決断が、後に小アジア西岸にミレトスを中心とする商業都市を建設し、ギリシャ本土ではアテネを中心とする都市国家を建設する遠因となったのであろう。“武力”を支配の原理とするドーリヤ人に、やがて“富力”を原理とするイオニヤ人が対抗する過程を経て、ギリシャの都市国家に貴族（ドーリヤ人）と市民（イオニヤ人）の間に調和ある“自由”の関係が再生されることになる。オリエントでは最古の文明以来、失なわれて再び回復されなかった重層構造の調和ある、自由の関係がオクシデントで回復されたことになる。オクシデントのオリエントへの誇りの拠り所がここにある。かくして、オクシデントには支配階級に、武力を主にする支配階級（Aristokratie）と富力を主にする支配階級（Plutokratie）の二つの原型を生ずることになる。オリエントの支配の形態が一元的であるのに対し、オクシデントの支配の形態は二元的となるのである。

#### (二) 貴族支配から金権支配へ

オリエントの諸国語で、ギリシャ人を指す言葉はすべてイオニヤ人であって、ドーリヤ人ではない。ペルシャ語 Yauna, インド語 Yonaka, アッシリヤ語 Javanu, トルコ語 Yunanisten,

創世記にヤベテの子孫ヤワンとあるのもすべてイオニヤ人のことである。これほど、オリエントの諸民族にとってイオニヤ人はギリシャ人を代表するものであった。

ところで、イオニヤ人が小アジアに建設した商業都市は、元来牧畜民族であったイオニヤ人の性格を反映して、貴族的支配構造をもつ商業貴族の都市であったが、当時は近代に起った大規模経営はなく小規模経営であったため、経営者と労働者の間には調和ある自由の関係が成り立ち易かった。小規模経営のため、労働者が機械の部品のように扱われたり、役畜のように扱われることなく、労働者の自主性が重んぜられていた。ここからイオニヤ商業都市における調和ある自由の関係が生み出されて来たのである。この重層構造は、ギリシャ本土の都市国家において、後続騎馬一民族であったドーリヤ人（貴族）と、先住戦車一民族であったイオニヤ人（市民）との間に、同じような調和ある自由の関係を形成させる重要な契機となった。両牧畜民族の間では、かつて牛がそうであったように馬が調和の媒介となることも加わっていたかもしれない。いずれにせよ、ギリシャ都市国家において形成された貴族と市民の平和な人間共同生活が、民主政治の範例としてしばしば言及されるものなのである。言うまでもなく、調和ある自由の関係と言ってもこれはあくまでも同じ支配階級であるドーリヤ人とイオニヤ人の間のことであって、両民族の足の下には依然として下層階級としての農耕民族が支配を受け続けていたのである。従って、重層構造の基本形態は変わらず、ただ、上層階級がドーリヤ人の上位戦士階層とイオニヤ人の下位商人階層に分かれ、両者の間に平和な人間共同生活が実現されたと言うにすぎない。ただし、武力も富力も国王と祭司の上層階級に集中し、専制政治以外にいかなる政治形態も生み出さなかったオリエント諸国に比較すると、曲りなりにも民主政治の萌芽がギリシャに生まれたと言えるのである。

古代ギリシャに発達した二つの重層構造の原型——武力を主にする *Aristokratie*、富力を主にする *Plutokratie*——がやがてヨーロッパの歴史を二分する時代がやって来た。この時代を境いにして人類の歴史は、武力を主にした“貴族支配”（*Aristokratie*）の長い時代と、“金権支配”（*Plutokratie*）の短い時代に分けられる。この時代区分によるならば、古代・中世は貴族支配、近代は金権支配の時代となる。時代のバランスは失なわれるが、重層構造という視点を置いて歴史の時代区分を行なうとこのようにならざるをえない。

### （三）重層構造と民主政治

重層構造が、武力＝貴族支配から富力＝金権支配に変わろうとも、支配を受ける下層階級の状態はそれだけでは変わらなうが。武力＝貴族支配の下におかれた古代ローマの大規模農場（*ラティフンディウム*）での農耕者の状態も、富力＝金権支配の下におかれた近代の大規模工場での労働者の状態も、支配階級の圧倒的な権力の支配を受けたという本質においては差なかったものと思われる。上層階級に下層階級への“思いやり”があり、下層階級が上層階級に“温順”であれば、両階級の間に“調和ある、自由”の関係が生じ易く、理想的にはここから平和な人間共同生活が生み出される。このような重層構造からは、“きしみ”の音が聞かれない。このような両階級の相互理解の上にのみ、民主政治は成り立ちえたのであるし、これからもそうであろう。従って、オリエントには専制政治しか成り立ちえなかったということは、オリエントにこのような両階級の相互理解はなかったということであり、平和な人間共同生活がなかったということであり、“調和ある、自由”の関係もなかったということであり、

上層階級に“思いやり”も、下層階級に“温順”も——面従腹背は別として——なかったということになる。

それでは、オキシデントにのみ発達しえた民主政治は、ヨーロッパの歴史においてどのような過程を経ることになるのであろうか？

#### ⊖ ペリクレスの民主政治

下層階級の鋒起に際して調停者に任ぜられたソロンは、重層構造に固有の“調和なき、支配”の関係を修正しようと努力した。ソロンによって開かれた“調和なき、支配”の関係から、“調和ある、自由”の関係へという民主政治の道は、クリステネスからペリクレスへと受け継がれた。アテネに民主政治の全盛時代を築いたペリクレスについて、ツキディデスは次のように評している。「ペリクレスには権威があり、風格があった。民衆を自由のうちに遊ばせたが、民衆にひきずられることなく、これをよく導いた。<sup>(13)</sup>」アテネの民主政治は、このような調和ある自由の関係の中で繁栄した。この関係を基にして、親和（*δμόνοια*）と友情（*φιλία*）に満たされた平和な共同生活が築かれた。ポリスのためには生命と財産を捧げて悔いない滅私奉公の精神は、“支配”から強制されたものではなく、“自由”から自生したものであった。

#### ⊖ アウグスツスの民主政治

ローマ帝国は、武力＝貴族支配の重層構造をもっていたが、初代皇帝アウグスツスはシーザーの求めたオリエンタ的専制政治を斥けて、オキシデント的民主政治を求めた。かくして、ヨーロッパの民主政治の流れは、ペリクレスからアウグスツスへと継承されることになる。ところで、アウグスツスの求めたローマ帝国における民主政治とはいかなるものであったのだろうか？これを雄弁に語るのは同時代の詩人ヴェルギリウスである。「ローマよ、汝の使命に忠実であれ！国を興し、これを導け！平和の国、正義の国を！踏みつけられた者が暖かいたわりを受け、傲慢な者の高き鼻が剣でへし折られる正義の国を。<sup>(14)</sup>」ヴェリギリウスの言う“弱きを助け、強きをくじく”というローマ的正義は、アリストテレスの言う“各人に各人のものを”というギリシャ的正義と対照的である。それは、ローマ的正義が歴史の背景に武力＝貴族支配の重層構造をもち、ギリシャ的正義が富力＝金権支配の重層構造をもっていたからである。ローマのそれは政治的正義であり、ギリシャのそれは経済的正義である。

#### ⊖ 教会の民主政治

ローマ帝国の末期を目撃した聖アウグスチヌスは、正義をなくしたローマ帝国は“盗賊の巢”<sup>(15)</sup>になったと嘆いたが、ギリシャ都市国家の末期にも生じた“共同体の崩壊＝大衆化”という社会現象は、ローマ帝国の末期にも生じていた。アトム化し、プロレタリア化し、大衆化しパンとサーカス<sup>(16)</sup>を求めてさまよう群衆を、武力をもって制圧し統一しようとしても無理であった。軍隊を増強しようとして重税を課すれば、無産化する群衆を増やすだけであった。この時代に、物質的にも精神的にも拠る辺を失なった群衆が流れついたのが教会であった。ギリシャ、ローマの古代世界、わが世の春を旺歌し従って現世肯定の自然宗教のみ勢力をはることが出来た古代世界で、今までは社会の片隅で細々と守られて来たキリスト教、現世否定の救済宗教であるキリスト教が、教会を通して広められるようになった。キリスト教はユダヤ教の流れをひくが、ユダヤ教を信奉するイスラエル民族は、世界に珍らしい重層構造をもたない民族である。イスラエル民族が、エジプトに寄留しヘブライ人とよばれた時代、エジプトに流れついた様々の民族と混淆したが、遂に重層構造をつくらなかった。イスラエル民族においては、全員が神の前

に平等であって、祭司といえども神の怒りに触れたならライ病にかかった。

キリスト教はこのイスラエル民族の宗教を承継いだので教会の中に重層構造をもっていない。教会の“階層秩序”(Hierarchie)は社会の“重層構造”(Überlagerung)と本質を異にする。民主政治の混乱はこの点の誤解に由来するが、これは後に述べることにする。社会の重層構造に押しつぶされ人間なみに扱われなかった奴隷や貧民が、重層構造なき教会という構成体<sup>(17)</sup>で、どれほど心身の休まる思いを体験したか想像に難くない。

#### ④ 議会の民主政治

近代に入り、宗教改革が起りルネッサンスが起り地理上の発見が起り、ヨーロッパが大きな動乱のつぼと化した時、この中で武力＝貴族支配の重層構造から、富力＝金権支配の重層構造へと上層階級の交替が進行した。この間、国家と現世・来世の支配権を分け合って対立していた教会は勢力を失なって行った。この結果、国家と教会の対立の谷間で勢力をはることの出来た土地貴族も都市商人も、国家(国王)に集中された権力のためにその地位が危くなるが、“武力”から“富力”に変る時代の流れを背景に、租税の負担能力においてすぐれている都市商人が土地貴族を蹴落して有力な地位を占めるようになる。両者の支配権をめぐる斗争は、国王の主権したいわゆる身分制議会(イギリスは模範議会、フランスは三部会、ドイツは等族議会と言う)において戦わされる。身分制議会は、土地貴族と都市商人の利害の調停と和解の場であった。身分制議会は後に国民議会へと発展するが、この過程を通して、上層階級のための調和と和解の場にすぎなかった議会在、下層階級をも含めた階級間の和解と調停の場へと成長して行った。ヨーロッパにおける民主政治の流れは、かくして、個人――教会――議会へとその担い手が変わって行くことになる。

### 四、高文化の功罪

#### (一) 重層構造の修正

高文化は、その成立のはじめから不安定であった。武力によるにせよ、富力によるにせよ支配する上層民族に不満はないにしても、支配される下層民族に不満が尽きなかったからである。両民族の間に民主政治が行なわれ、調和ある自由の関係が成立する間がわずかに下層民族の救いであった。しかし、この幸福な時が過ぎ、再び専制政治が行なわれ、調和なき支配の関係が押しつけられると下層民族に救いはなかった。かくして、きしみ合う民族あるいは階級の中、高文化は今日にまで至っている。重層構造の中にある“支配”の関係を緩和し、“自由”の関係を促進することが不安定な高文化を安定させる鍵である。確かに、高文化がなければ人類の文化は物質的にも精神的にも今日の発達をとげることはなかったであろう。しかし、この文化の陰には、下積みにされた下層民族あるいは下層階級の汗や涙や血が流されている。どうしてこんな悲惨なことがくり返されたのか？ それは、下層民族や下層階級の生の声が聴取されることがなかったからである。下層民族の声なき声を以下に二、三拾い集めてみよう。

#### ⊖ 共同体への郷愁

二つの民族が合体し重層構造を形成する時、それ以前に形成されていた両民族の“自然的共同体”は解消し、重層構造の中で新しい“文化的共同体”がつくられる。文化的共同体は両民族による外生的な共同体であるから、各民族の中に自生的に起った自然的共同体とは性格を

異にする。もし、文化的共同体が、支配民族の単なる支配の道具にすぎないならば、下層民族の中に失なわれた自然的共同体への強烈な郷愁が生じて来るのは当然のことである。人間は共同体的存在であるから、共同体が奪い去られることに耐えられない。下層民族の主たる居住地農村では、共同体再生がしばしば企てられたことであろう。共同体は、都市よりも農村の方が育ちやすい。武力にも富力にも縁のない下層民族が仮に誇りうるものがあつたとすれば、共同生活の中で培われた地縁あるいは血縁の団結ぐらいのものであつたろう。

#### ㊦ 上層民族への羨望

上層民族への羨望、それは都市生活への憧れでもあつた。上層民族は、下層民族の羨望を有能な者を上層階級にひき上げることにより満してやった。これにより下層民族の不満を和らげようとした。しかし、上層民族が下層民族に気前よくふるまおうとすればするほど、他に領土と領民を広げなければならなくなった。高文化が外に向って進出するのはこのためである。高文化が内部の下層民族を喜ばせようと外に進出することは他の高文化との激突を生じたが、このことを通じて今日の国際関係が形成されて来た。

#### ㊦ 君主制の要求

搾取されることは宿命である下層民族であるが、出来るだけ搾取の機会を少なくしようと計るのが当然である。このためには、上層民族の搾取者が多いより少い方、むしろ一人であることが望ましい。かくして、搾取される下層民族にとっては、貴族制よりも君主制が望ましい。勿論、暴君であっては困る。望ましいのは、権力が制限された君主制であることである。このためには立憲君主制がよい。しかし、もっと望ましいのはペリクレスやアウグスツスのような明君が、下層民族の声なき声をよく聞きとって、自由と正義の政治をしてくれることである。

### (二) 高文化成立の条件

高文化が形成されてはじめて、人類は自然的生活から文化的生活へと発展できた。自然的生活の「手から口へ」の生活からの自然の中に第二の自然というべき文化を生み残して行くことができるようになった。前なる世代の文化の上に後なる世代の文化が重ねられた。文化の継承や文化の批判がこのようにして起るようになって来た。人類は歴史的に生きるようになって来た。同時に、人類は歴史に責任を負うようになって来た。高文化が健全に発達するためには、いくつかの条件を必要とする。リュースターは、以下の五つの条件をあげている。

#### ㊦ 社会の底辺が形成されること。

高文化が成立するためには、まず統一された——支配された——社会階級の底辺を必要とする。この社会階級の統一が失なわれると、文化水準は低落せざるをえない。ギリシャ都市国家の末期、ローマ帝国の末期、中世ヨーロッパの末期の文化の衰退はこうして起った。

#### ㊦ 都市が形成されること。

文化を生むのは、精神的労働者である。このような専門職人は、ある所に集住させられなければならない。専門職人が精神的労働に専念できるためには、専門職人の日常の食料と必要品を運びこむ商人の存在が必要となる。かくして、職人と商人の共同居住地、都市が建設されることになる。都市は戦士が護衛し、戦士は周辺の農民をも監視する。古代ギリシャの集住（シノイキスモス）、中世修道院の共同生活、近代工業都市の成立はこのようにして起って来た。

#### ㊦ 自由であること。

“都市の空気は自由にする”という諺は、都市と文化の深いつながりを示唆している。肉体的労働は、“アメとムチ”で強制されても、精神的労働は強制されて生れるものでない。そうして生れたとしても、それは貧弱なものであろう。後世に残る雄渾な文化というものは、自由の中から生まれ出る。自己の意志の決定は、自己以外の何者によっても束縛されない——この意志の自由を欠いたら、人類の精神の所産である文化の発達は望めない。古代ギリシャの都市国家の文化、中世ヨーロッパ後期の自由都市の文化、近代イタリアのルネッサンス都市の文化、みな自由の空気の中から生れたものである。

#### ④ 防衛能力をもつこと。

文化が栄えても、外敵に滅ぼされては何にもならない。高文化は幾度もこの苦汁をなめて来た。ギリシャの都市国家はマケドニアに、ヘレニズム諸国家はローマ帝国に、ローマ帝国はゲルマン民族に、中世自由都市やルネッサンス都市は領主貴族と絶対君主に、ドイツ十八世紀のワイマール都市はナポレオンにそれぞれ滅ぼされた。

#### ⑤ 親睦の共同体をもつこと。

高文化には、重層構造によって失なわれた自然的共同体への郷愁——*Sehnsucht*——がある。失なわれた人類の楽園、エデンの園への郷愁がある。農耕民族が農耕民族、牧畜民族が牧畜民族でありえた時に生み出された貧しくとも睦じくありえた自然的共同体への郷愁がある。人間は共同体——人間和合の現実——を離れて安息を見い出せない。肉体を器にその中に魂が守られているように、共同体を器にして人間はその中で守られている。共同体を失なうと人間の精神は萎縮する。萎縮した精神が、どうして精神の所産たる文化をはらみえようか？ ギリシャ都市国家の末期、ローマ帝国の末期、中世ヨーロッパの末期の社会と精神の状況がこうであった。

### (三) 高文化の矛盾

ピラミッドの法則によれば、社会の底辺を広くすれば文化の頂点は高くなる。この法則は、文化の物質的＝量的面ではこのままにあてはまる。しかし、文化の精神的＝質的面ではこの通りではありえない。巨大な社会、巨大な都市は、確かに今日みるように量的には高い文化を生み出している。しかし、今日のように量産されている文化の中にどれほどの *Originalität* (獨創性) があるかという点に疑わしい。多くは、すでにあったものの模倣にすぎない。量だけで質を問題にしない今日の時代は、このことを不審とは思わない。現代人の言う質とは性能のことであって、独創のことではない。モデル・チェンジ (*model-change*) と言ってもモデル・クリエート (*model-create*) ということをして人は言わない。しかし、歴史の審判は文化の量の上でなく、文化の質の上に下されるのではあるまいか？ いずれにせよ、歴史に文化の名を残した都市は、大都市でなく小都市であった。ギリシャのアテネ、ルネッサンスのフィレンツェ、ドイツのワイマールみな小さな都市にすぎなかった。ゲーテは当時のワイマールを評して「ユダヤのベツレヘムのように小さく、しかし偉大である。<sup>(18)</sup>」と言ったが、1775年、ワイマールの人口は6000人にすぎなかった。

しかし、高文化には常に二つの成立条件、防衛能力と親睦共同体の間に矛盾が生ずるのを避けえない。文化の質は親睦の共同体、従って狭い社会の底辺を要求する。しかし、これでは高文化の防衛能力が低下する。逆に、文化の量を高め、防衛能力をつけようとすれば、親睦共同

体は損なわれ、文化の質も低下する。高文化は、この矛盾によって悩まされている。高文化が、防衛能力をおとしても親睦共同体を守り、文化の質を高めようとするならば、他の高文化との連帯により自己の高文化を守る他はないであろう。しかるに、ギリシャ都市国家は遂に永続する都市国家の連帯を結びえなかった。ペルシャ戦争の時には連帯できたアテネとスパルタも、ペロポネソス戦争を起してからでは連帯することができなかった。かくして、ギリシャ都市国家はマケドニアに滅ぼされてしまったのである。現代の高文化もほぼ同じような事態に直面している。北の脅威、東の脅威、それがいずれから来るにせよ、連帯を失なった高文化は滅びゆくことになるだろう。

## 五、高文化の未来のために

### (一) 社会化と民主化

重層構造における社会の形成原理は、上層民族の下層民族への“支配”と“服従”によったものである。いずれの民族が上位に来るかは、武力の優劣がこれを決めた。“力”が支配の根拠であったから、権力主義が原則となった。これに対して、重層構造以前における社会の形成原理は、部族内部の上位者の下位者に対する“指導”と“心服”によったのである。誰が部族の上位に来るかは、経験や勇気がこれを決めた。知や勇を含めた“徳”が支配の根拠であったから、権威主義が原則となった。

例えば、原始キリスト教会のはじめイエスと弟子の関係には、“支配”と“服従”の形跡は全くない。イエスと弟子の関係は、去るも自由、残るも自由であって、イエスに“心服”する者だけに、イエスは“指導”をほどこした。イエスはこの関係を弟子達に説明してこう言った。「あなたがたの知っているとおり、異邦人の支配者と見られている人々は、その民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべての人の僕とならねばならない。人の子——イエス——がきたのも、仕えられるためでなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである。」<sup>(19)</sup>と。

命をなげ出して病人、貧者、罪人に仕えたイエスへの“心服”，そしてイエスの“指導”という関係からイエスの集団が形成され、原始キリスト教会、そして古代・中世・近代の教会へと発展した。この発展を通して、イエスの言葉は守られた。中世の修道院長ベネディクトゥスもこう言っている。「修道院長は、指揮するよりも奉仕せよ／(magis prodesse quam praeesse)」と。このような言葉の中に示されている社会の形成原理は、おそらく重層構造以来失なわれてしまった自然的共同体のそれに近いものであったろう。ペリクレス、アウグスツス、教会、そして議会へと受け継がれて来たヨーロッパの民主政治の流れは、上層民族と下層民族、あるいは上層階級と下層階級の間を、“調和なき支配”から“調和ある自由”へと修正しようとするものであるが、別の表現にすれば、文化的共同体の中に自然的共同体を再生させようとする努力であるとも言えるだろう。

しかし、このように言う“民主化”とは社会構造の上下関係をなくすることのように誤解されやすいがそうではない。人間の社会構造は、今も昔も上下の関係によって成立っている。

これは、社会構造の普遍の原理であって、この点は自然的共同体でも文化的共同体でも変りはない。両者の間には、上下関係の“在り方”に相違があるだけである。前者の関係が権威主義的であり、後者が権力主義的であるだけである。上下の関係はなくなる。従って、自然的共同体も“階層的秩序”(Hierarchie)をもち、文化的共同体が“重層構造”(Überlagerung)をもつと同じである。

高文化から階級をなくして、階級なき社会、階級なき国家をつくろうというのは“社会化”であって“民主化”ではない。高文化に上層階級と下層階級の入れ代ることが起っても、階級そのものはなくなる。社会に上下関係のあることは社会の形成原理であるからである。仮に、階級なき社会構造を創設してみても、矛盾はすぐに表われるであろう。何故なら、この新しい社会で“なまけ者”と“はたらき者”とが同じ給料をとり、同じ権利を行使すれば、あのギリシャ的正義、経済的正義——各人に各人のものを／＼（なまける者にはなまけた分、はたらいた者にははたらいた分）——はどうなるであろうか？ 正義が地に落ちれば、社会はいつかは滅び行く。

高文化において“民主化”を計るということは、とかくきしみがちな上下関係を相互に耐えやすきものに修正することを意味しているにすぎないのであって、この点“社会化”を計るということと厳しく区別されねばならない。

## (二) 自由と平和と正義

リュストーは、自己の学問の価値前提を明示している。それによると、リュストーの文化社会学は三つの価値を前提にしていることがわかる。

- ⊖ “自由”を肯定し、“支配”を否定する。
- ⊖ “平和”を肯定し、“戦争”を否定する。
- ⊖ “人間尊重”を肯定し、“人間蔑視”を否定する。<sup>(21)</sup>

リュストーが掲げた以上三つの価値目標を、その実現可能性を疑う人は居ても全面否定する人は居ないだろう。この意味で、これらは人間の理性が誰のものであれ肯定せざるをえない人類の未来目標と言えるのではあるまいか？ 別の言葉で言えば、以上三つの価値は人類普遍の原理と言えるのではあるまいか？

ところで、これらの価値目標はヨーロッパの歴史の中で、どのように生み出されて来たのであろうか？ すでに見て来たように、オキシデントにのみオリエントとは異なり、二種類の上層階級が形成されていた。貴族的上層階級と商人的上層階級の二つである。古代ギリシャの都市国家において、この二種類の上層階級が調和ある社会秩序を形成した。この秩序を範例として、ヨーロッパの民主政治——“支配”を原理とせず、“自由”を原理とする重層構造——が発展して来た。かくして、ヨーロッパの“自由主義”(Liberalismus)はその源泉を、貴族的上層階級と商人的上層階級の形成した社会秩序に汲むことがわかるのである。こう見ると、古代から中世そして近代に至る自由主義の巨大な流れは、古代ギリシャの商人上層階級の切実な要求に端を発していることになる。近代の自由主義が、ブルジョア階級の旗じるしとされているのも当然のことと言える。

次に、“平和主義”についてはどうであろうか？ 古代ギリシャの民主政治は、古代ローマに至りアウグストゥスに継承されたことはすでに見て来たところである。しかし、古代ギリシャ



と古代ローマとでは、その民主政治の社会的背景は全く異なっていた。古代ギリシャにあった貴族的上層階級と商人的上層階級の対立は、古代ローマになかった。ローマの支配階級は、貴族のみであった。従って、古代ローマの民主政治は、貴族的上層階級と農民的下層階級という社会的背景の下で行なわれた。アウグスツスの民主政治は、詩人ヴェリギリウスがこれを代弁したように、“弱きを助け、強きをくじく”を原理とするものであった。このような政治的正義の主張は、何よりも貴族的上層階級のものであった。貴族が腰に帯びた剣は人切り包丁であったのではなく、高慢に弱き者を足蹴にして威張り散らす乱暴者を制裁する正義の刃であったわけである。ローマの剣が、正義のシンボルでありえた間は、*pax romana* も健全でありえたわけである。このような平和主義＝政治的正義の流れは、下層階級から出たものでなく、上層階級の要求として生じたものであった。官僚は、元来、このような意味で平和の使徒たる使命をもつのである。官僚は、歴史をさかのぼれば貴族であり、戦士であった。

日露戦争はかつて“聖戦”と呼ばれ、貧しきアジアをいじめる大国ロシアの高慢をくじくのであると叫ばれたが、あの頃は日本にもローマの正義が生きていたし、この正義感にふり立つ貴族的上層階級もおお健在であったわけである。国外に領土を求めた侵略主義ばかりではなかったはずである。ところが戦後、日本の国から鉄拳制裁の言葉を聞かなくなってから時久しい。剣が正義のためでなく我欲のために用いられ、すっかりミソをつけてしまったためであろう。日本に剣が帰って来ても、正義が帰って来なければ何もならない。

最後に、“人間主義”についてはどうであろうか？ リュースターの言う人間尊重、あるいは人間主義も正義の要求の一つではないだろうか？ これは、ローマ人ヴェリギリウスの言う“弱きを助け、強きをくじく”という政治的正義とも、ギリシャ人アリストテレスの言う“各人に各人のものを”という経済的正義ともジャンルを異にする第三の正義ではあるまいか？ これは、仮に名づけるならば、社会的正義と言えないだろうか？

言葉の厳密な意味で、キリスト教的正義というものがあるとすれば、それはこの種類の正義であるように思われる。リュースターがいみじくも“人間尊重”と呼んだものがこの正義の特長である。人間扱いをされていなかったローマ帝国の奴隷階級の間に燎原の火のようにペテロの説教が広まったのは、人間扱いされていなかった奴隷をも暖く抱きかかえる“神の愛”(*ἀγάπη*)が奴隷の心に感動を与えたからであろう。ローマ・カトリック教会のなした数々の業績の手はじめは、奴隷階級に人間的な交わりの手をさしのべたことにあったと思われる。上層階級の支配の前には虫けらのように服従するより道のなかった下層階級の心の奥に、人間である限り、色が黒かろうが赤かろうが、“人間尊重”(俺たちも人間なのだ!)の叫びが眠っていても不思議でない。ローマ・カトリック教会は、奴隷階級の心の奥に眠るこの叫びをよび起し、かつこの要求に応えようとしたのである。かくして、正義の要求は下層階級の要求の中に源流を汲むと言えるのである。

十九世紀になり、以上三つの価値——自由と平和と正義——は、一時信仰と結びついていたにも拘らず、“神なき時代”に再び階層のイデオロギーに逆もどりした。自由を価値目標とする“自由主義”(Liberalismus)は市民層のイデオロギーに、平和を価値目標とする“国家主義”(Nationalismus)は官僚層のイデオロギーに、正義を価値目標にする“社会主義”(Sozialismus)は貧民層のイデオロギーに再び帰ることになった。以上の価値と階層とイデオロギーの関係に宗教的視点を入れて、カトリック教派、カルヴィン教派、ルター教派との関係をも合わ

せ明らかにしたのが、ミュラーアルマックの業績であったが、ここでは触れないことにする。一言だけ添えておけば、ミュラーアルマックが、イデオロギーの根源を宗教の信仰に求めたのに対して、リューストラーは社会の階層の中に求めたのである。これが宗教社会学と文化社会学との相違でもある。

ミュラーアルマックの命名になる「社会的市場経済」(Soziale Marktwirtschaft)という戦後西ドイツに起った経済学の学派は、別名「新自由主義」(Neo-Liberalismus)とも呼ばれている。しかるに、この学派の学者は、いずれもこの名称を好まない。何故なら、この学派の学者達は自由の価値を尊重するが、決して市民階層のイデオロギーではないからである。かと言って、正義の価値を認めはするが、貧民層のイデオロギーでもなく、この階層のイデオロギー政党社会主義者でもない。勿論、平和の価値も求めるが、官僚層のイデオロギーではありえない。戦争中、この階層の掲げたイデオロギー、国家主義と最も激しく戦ったのは、社会主義者と並んでこの学派、いわゆる自由主義者であった。

かくして、この学派の目ざすところは、三つの価値をともに許容した、総合的な価値体系であることがわかる。このような体系が、具体的な体制の中で実現される道は、はるかに遠いが、この体制が実現されるためには、各階層の和解、各イデオロギーの相互理解、更にはミュラーアルマックの言う宗教和解——Irenik——をも前提としなければならない。かく言えば、大層難かしいことのようなのであるが、道は遠くても目標は目の前に下がっている。結局、人間和合の現実としての共同体が——重層構造以降の“文化的共同体”ではなく、それ以前の“自然的共同体”——この現代文明の中で再生されるか否かに懸っているのではあるまいか？

どんなに社会の底辺を広くし、文化の頂点を高くしたとしても、それが量的なもので終り、質的なものを失なっていてはどうであろうか？ 量的な社会が大衆社会であり、量的な文化が大衆文化で終ってよいものであろうか？ 社会からは質的なもの——共同体、文化から質的なもの——独創性が失われてよいものであろうか？ すでに見たように、共同体の失なわれる所では、人間の精神が衰弱する。精神の衰弱する所では、独創性が失なわれる。現代文明とよばれる今日の高文化において、このような恐るべき人間の精神の崩壊が進んでいる。今日の文明の危機は、精神に、人間性そのものにまで迫っている。現代文明には、救いが必要であると言えないか？

## 註

- (1) Wilhelm Röpke : Gegen die Brandung, 2. Auf, 1959, S.33.
- (2) a. a. O. S. 36.
- (3) a. a. O. S. 36.
- (4) a. a. O. S. 37.
- (5) a. a. O. S. 37.
- (6) アーノルド・トインビー著 松本重治訳「歴史の教訓」 1977年

- (7) Alexander Rüstow : Die Zukunft des Untenehmertums, S.12, in,, Gegenwarts und zu-  
funftsaufgababen des Unternehmertums, 1956.
- (8) a. a. O. S. 12.
- (9) 苑仲淹・岳陽桜記：先天下之憂而憂，後天下之樂而樂。この言葉は，難波田春夫教授の主宰される「経  
済研究会」で初めて感銘深く耳にした。ただ，教授がその時，筆者と全く同じ意味で用いられたかど  
うかは記憶にない。
- (10) Joseph A. Schumpeter : History of Economic Analysis, 1961.
- (11) この概念は，リュストー社会学の key word であって，主著「現代の定位」のいたるところに出て来  
る。
- (12) Alexander Rüstow : Ortsbestimmung der Gegenwart, Band I, 1950, S. 39.
- (13) Alexander Rüstow : Ortsbestimmung der Gegenwart, Band II, 2. Auf, 1963, S.103.
- (14) a. a. O. S. 176.
- (15) a. a. O. S. 183.
- (16) panem et circenses
- (17) ペリクレス，アウグストゥスとそれまで個人的，あるいは人格的主体によって継承されて来た民主政治  
が，ここに至って“教会”という超個人的，あるいは構成的主体に継承されたことになる。人格的主  
体の生命力は，七十年，長くて八十年にすぎない。しかし，構成的主体は，これをはるかに超え，歴  
史の中を数百年，あるいは数千年生き続ける。民主政治を担う主体が，この時代に，個人から構成体  
—— Gebilde —— へと移された意味は限りなく深い。近代に入り，民主政治は“教会”という在內構  
成体から，“国家”という包括構成体へと更に移される。“議会”における民主政治がこれである。  
今は，世から捨ててかえり見られないオットリリエンフェルト・ゴットルの「構成体論的経済学」か  
ら今日でも学びうるところは多い。ゴットルに学んだ酒枝義旗教授は，主宰された「ゴットル研究会」  
で，生活の主体は，⊖有機的主体（動物，植物）⊖人格的主体（人間個人）⊖構成的主体（家庭，企  
業，国家）の三種類に分けられることをしばしば語られた。
- (18) Alexander Rüstow : Ortsbestimmung der Gegenwart, Band II, 2. Auf, 1963, S. 372.
- (19) 新約聖書「マルコによる福音書」10章42節 — 45節。
- (20) Alexander Rüstow : Ortsbestimmung der Gegenwart, Band I, 1950, S. 103.
- (21) a. a. O. S. 19.